



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

— 名前のなかった役割 ① —



松岡園子

名前のなかった役割が、大人の私に残したもの

世の中で語られる「親子逆転」は、多くの場合、大人になってから始まる。親が年を取り、体や判断力が衰え、成人した子どもが支える側に回る。それは人生の時間軸の中で、ある程度、想定されている出来事だ。社会には言葉があり、説明のための枠も用意されている。

けれど私の時間は、ずっと前に、ずれて始まっていた。

12歳のとき、母と二人で暮らすことになった。母は統合失調症で、幻聴や幻覚が見えることがあった。そこでは、現実がいつも同じ重さでそこにあるとは限らなかった。聞こえていない声に返事をし、見えていないものを前提に話が進む日がある。けれど生活は、どんな状態でも止まらない。

食べること。
買い物をする事。
今日を終わらせ、
明日につなぐこと。

それらを現実として保つ役割に、立てる人は1人しかいなかった。だから私は、子どもである前に、判断する人になった。

感情よりも段取りを。
怖さよりも現実確認を。

泣くより先に、今日が回るかどうかを考えた。

周囲の大人たちは、私を見て「しっかりしている」と言った。

「親子逆転だね」とも言われた。

それはきっと、褒め言葉として使われていたのだと思う。

けれど私にとってそれは、性格の話でも、成長の早さでもなかった。

生きていくために、自分がするしかなかった。

それだけだった。

この役割には、名前がなかった。

介護でもない。

支援でもない。

責任の所在を示す言葉もない。

ただ家庭が崩れないように、そこに立ち続ける役割。

名前がないということは、終わりも用意されないということだ。

だから大人になった今も、私は無意識に「止めない人」でしようとする。

回す人。

最後まで残る人。

いなくなったら困る人。

それは能力ではなく、長いあいだ身についた姿勢のようなものだった。

私はこの役割のおかげで、現実が強くなった。

判断は早く、責任から逃げにくい。

でも同時に、休むことや引き受けない選択に、理由を必要とするようになった。

最近になって、ようやく気づいた。

私は、大人になってから親を支え始めたのではない。

子どもであるうちに、その役割を始めてしまったのだ。

今しているのは、過去を責めることではない。

あの頃の役割に、

ちゃんと名前を与え、

役目を終わらせようとしている。

それは、ずれて始まった時間を、少しずつ本来の位置に戻す作業でもある。